

2015 年研究旅行奨励制度報告書

「韓国における近現代の民主化運動を辿る」



17AR097 増本雄大

-目的地-

韓国(釜山、ソウル、光州)

-研究旅行の目的-

昨年、「韓国学への招待」という授業を履修し、また夏に行われた「日韓米国際共同プログラム」に参加した。座学で勉強した韓国における近現代の民主化運動について、実際に運動が行われた場所、また民主活動家達を取り締まっていた場所へ行き、よりこのことを深く理解することがこの研修旅行の目的である。

私自身、韓国に友人が多数いて交流する機会が多くある。しかしそれは人と人との交流、友人の理解という段階で国民性というものを理解するまでには至っていない。韓国を考えると、私は「Uri (私たち)」という言葉を考えている。例えば韓国では自分の国をUriナラ (私たちの国) という言い方をする。家や学校にもUriを付ける。日本ではそのような言い方をされることはあまりないように思う。そのことを念頭に置きながら今回のテーマである民主化運動を考えると、より韓国の国民性に興味を持った。そこでこの研修旅行を通じて民主化運動のバックグラウンドにある韓国の国民性を知りたい。

2014年4月、韓国ではセウォル号沈没事件が起きた。セウォル号事件で家族や大切な人を亡くした方々が事故原因の真相糾明運動を行っていたが、その中ある韓国政府与党の国会議員が「アカ」と発言した。アカとは共産主義者、即ち韓国では北朝鮮側の人間とされる。なぜこのような発言をこの国会議員はしたのか?という疑問があった。そして民主化運動においても、民主化運動を題材にした映画(「南営洞 1985」など)でも頻繁にアカ扱いする場面がある。民主化運動の地をおとずれ、この近現代韓国にある反政府=アカという図式をより詳しく調べてみたい。

そのために、ソウルでは大韓民国歴史博物館、ソウル歴史博物館、南営洞にある軍事政権時代、監獄として使用された場所に訪れ、光州では、国立五・一八民主墓地、五・一八記念公園、五・一八自由公園を訪れる。釜山では、四月革命(1960)や釜馬民主抗争(1979)、六月民主抗争に調べるために民主公園、釜山博物館を訪れ、民主化運動のを中心にして調査をする。

このように調査することで、韓国のことをより深く理解することができればと考えている。

-日程-

	滞在地	行動・調査内容
第1日目	福岡→釜山	釜山到着
第2日目	釜山	釜山博物館大韓民国歴史博物館、釜山博物館
第3日目	釜山→ソウル	釜山よりソウルへ ソウル到着のちソウル南営洞,ソウル歴史博物館へ
第4日目	ソウル	大韓民国歴史博物館、ソウル歴史博物館
第5日目	ソウル→光州	ソウルより光州へ 到着後国立五・一八民主墓地へ
第6日目	光州	巡礼地へ
第7日目	光州	五・一八記念公園、五・一八自由公園へ友人の両親から光州事件の話を聞く
第8日目	光州→釜山	民主公園へ
第9日目	釜山→福岡	帰福

-研究報告-

1. 初めに

韓国における近現代の民主化運動は朝鮮戦争以降のものである。李承晩政権時から盧泰愚が1987年に直接選挙制改憲案を受け入れるという6・29民主化宣言を発表し、翌10月民主憲法を勝ち取るまでに及んだ。その中で多くの民が命を失っている。

日本で暮らしているが日本人はこの事実を知るものは少ない。これはメディアが大きく取り上げていなかったことも大きく、また今日ほど日本人が韓国という国に関心を持ってなかったことも一因であるだろう。日韓国交正常化50周年になる2015年、韓国のことを知る機会にしたい。

2.釜山

釜山は市民・学生運動が盛んに行われていた。特に1979年に起こった釜馬民主抗争は大規模なものであった。

これは不況の中での深刻な生活苦にくわえ、地元選出の金泳三への政府の仕打ちが引き金となった。この事態により釜山は一时无政府状態となって非常戒厳令が敷かれている¹。

しかし現在の釜山には民主化運動時の傷跡を見ることができる場所は少ない。釜山博物館、民主抗争記念館に私は訪れたが、釜山博物館には近現代の民主化運動の展示物はなく、館内にて流れていた釜山の近代化における動画にてわずかだけ映る程度であった。



(撮影者 増本雄大)

上の写真は民主抗争記念館の入り口である。山の上にある。バスの終点でこの地があるが、この記念館の入場者は民主抗争を取り扱っているフロアには全く人がいなかった。友人も釜山出身だがこの記念館には行ったことがないという。

中の展示物もあまり多くなかったが、外に忠魂碑などがある。



(<http://nekonote.jp/korea/park/minsyu/index.html>) より

上の写真は敷地内にある四月民主革命の慰霊碑である。このような碑がいくつかあった。

¹ 文 京洙『韓国現代史』、岩波新書、2005年、138頁参照

3. ソウル

ソウルは首都ということもあり民主化運動においては大規模なものが多い。多くの大学でデモが行われ、多くの死傷者が出ている。

私がソウルで訪れた場所は大韓民国歴史博物館、ソウル歴史博物館、対共分室跡である。このうちソウル歴史博物館には民主化運動の展示物はなかった。



(http://japanese.visitkorea.or.kr/jpn/TE/TE_JA_7_1_1.jsp?cid=1937466) より
上の写真は 大韓民国歴史博物館である。ここは韓国で一番大きな博物館ということもあり展示物が多かった。また、訪れた時は「70 Voices of 70 Years」という韓国の近現代をテーマにした特別展が開催されていた。それにより民主化運動の展示も多くあった。



(大韓民国歴史博物館より 撮影者 増本雄大)

上の写真は四月革命時の写真である。四月革命は 4.18 に高麗大学校の学生がデモを起こし、これに対し自民党系の政治ゴロが襲い掛かり、乱闘の末、学生 1 人が死亡、50 人余りが負

傷した。翌日には憤怒したソウルのほとんどの大学生が決起し、10万を越える学生・市民が光化門前広場を埋めた。大統領府に迫ったデモ隊に対して警察が発砲し、「血の火曜日」と呼ばれる流血事態となった。デモはその日のうちに全国に波及し、死者はソウルで100人を越え、全国で186人に達した²。



(大韓民国歴史博物館より 撮影者 増本雄大)

上の図は戦闘警察が発射した催涙弾が後頭部に当たり昏睡状態の後、亡くなった延世大学の学生だった李韓烈の葬式である。



(<http://liumeiuru.hacca.jp/102/>)より

上の写真は前対共分室、今は警察庁人権保護センターである。ここは以前に反政府活動をする市民や学生を取り調べ拷問していた場所である。現在は4階と5階が開放されている。

²文 京洙『韓国現代史』、岩波新書、2005年、95頁参照



(警察庁人権保護センターより 撮影者 増本雄大)

上の写真は警察庁人権保護センターの4階の様子である。4階は朴鐘哲の記念館になっている。朴鐘哲は対共分室にて1987年1月、他の手配中のソウル大生の居所を迫及する警察が水攻めや電気拷問を受け亡くなっている³。

彼の死後、彼の死への抗議と改憲をもとめる6月10日の国民大会に始まり、その日から26日の「民主憲法争取国民平和進行」までの十数日間、学生をはじめ、野党政治家、在野人士、教育、言論、宗教の各界関係者、タクシードライバー、バス運転手、サラリーマン、OL、主婦、商店主、露店商、はては子供にいたるまで、まさにありとあらゆる立場や階層、分野の市民が街頭に進出し、新軍部を包囲した。また、上記の李韓烈は国民大会に出るために6月9日、延世大学校での「6・10大会出征のための延世人決意大会」にて催涙弾が当たっている⁴。



(<http://liumeiuru.hacca.jp/102/>) より

上の写真は警察庁人権保護センターの5階の様子である。この階は2部屋開放されていて1つは上記の朴鐘哲の拷問が行われた部屋で、もう1つは金權泰の拷問が行われた場所で

³文 京洙『韓国現代史』、岩波新書、2005年、164-165頁参照

⁴文 京洙『韓国現代史』、岩波新書、2005年、164頁参照

ある。彼は盧武鉉政権時保健福祉部長官を務めている。彼の拷問は南宮洞 1985 にて描かれている。

4.光州

光州は韓国の民主化運動を語る上で欠かすことのできない場所である。光州民主化運動が 1980 年 5 月 18 日に起きた。この日を光州市民は忘れることはないだろう。光州出身の友人はこの民主化運動を小さな時から学校で習っている。また地下鉄の壁に写真があるなど光州においてこの運動がどれほど大きなものかがわかる。

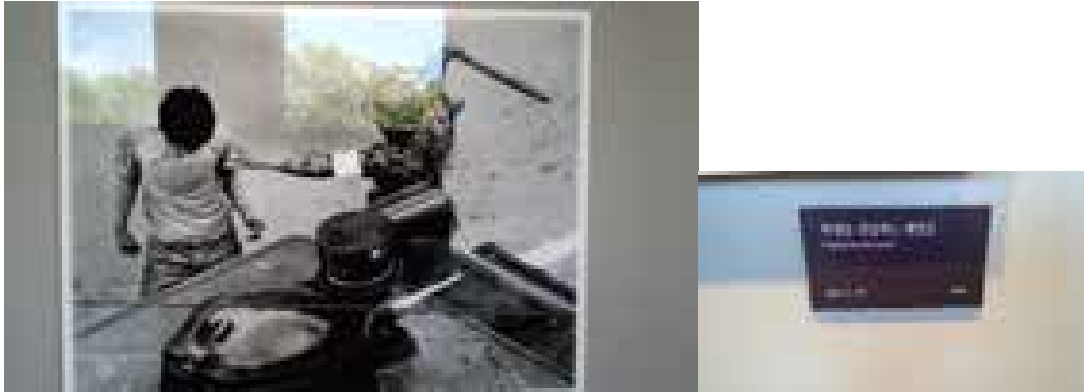
光州という地は全羅道に属している。光州空港への路線はソウルの金浦空港からと、済州島の済州空港しかない。また日本の新幹線にあたる KTX もソウルからは出ているが韓国の第二都市である釜山までは開通している。私も光州の地を訪れた際、光州から釜山に行くには高速バスしかなかったので少し困った。

1979 年 10 月 26 日、朴正熙大統領が金載圭・中央情報部長に銃撃され死亡。全国に非常戒厳令が宣布される。そして 12 月 12 日、全斗煥などの属す「ハナ会」を中心とした新軍部がクーデターによって軍内での実権を掌握した。

1980 年には 5 月 17 日に非常戒厳令は全国に拡大される。さらに 18 日には金大中、文益煥、金鐘泌、李厚洛など 26 人を騒擾の背後操縦や不正蓄財の嫌疑で逮捕し、金泳三を自宅軟禁した。さらに、政治活動の停止、言論・出版・放送などの事前検閲、大学の休校などを盛り込んだ戒厳布告を発表した。5.17 クーデターである。これを主導したのは全斗煥をはじめとする新軍部であった⁵。

18 日未明には、第七空挺旅団の 33 大隊と 35 大隊が光州の全南大と朝鮮大に配置された。空挺部隊は、北朝鮮との非正規戦遂行のために訓練を受けた部隊であった。朝、この空挺部隊と学生との最初の衝突が全南大の校門前で起きる。200 人余りの学生との間で始まったこの衝突は、指導部が機能麻痺の状態のなかで起きた自然発生的なものだった。校門前でいったんは蹴散らされた学生たちは、光州駅前広場で隊列を整え、道庁に向かうメイン・ストリート(錦南路)をデモ行進し、今度は機動隊と衝突した。午後には空挺部隊が市内各所に投入され学生たちを手当たり次第に殴打して服を剥ぎ取り、下着一枚にしてトラックに押し込んだ。この日 400 人以上の学生が連行され、80 人が負傷した。19 日、デモの主体は激昂した市民たちに替わった。第 11 空挺部隊が急派されたが、市民たちは角材、鉄パイプ、火炎瓶などでわたりあった。午後、デモ群衆は 2 万人に膨れ上がった。

⁵文 京洙『韓国現代史』、岩波新書、2005 年、141 頁参照



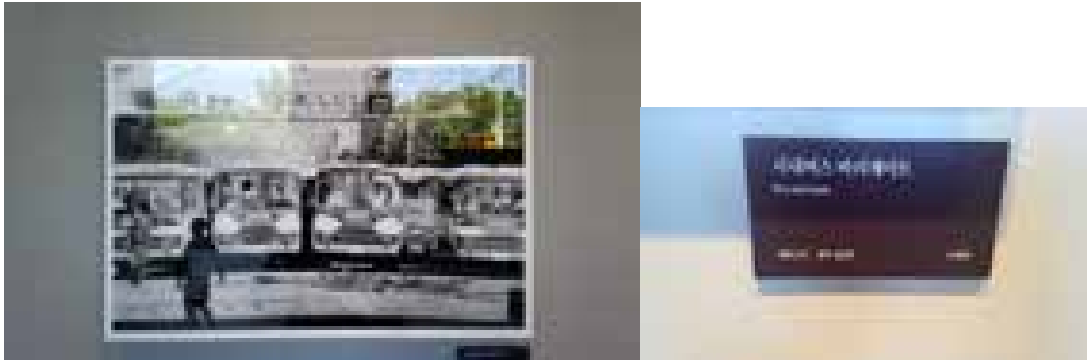
(大韓民国歴史博物館より 撮影者 増本雄大)

衝突は 21 日まで連日つづいた。その間、警察署が占拠され、MBC 放送の建物が焼き討ちされて全焼した。その間、MBC は戒厳軍の一方的声明のみを伝え、市民たちの怒りをかっていたのである。21 日には、空挺部隊が一斉射撃に及び駅前広場は血の海となった。これに対して市民たちは羅州や木浦の武器庫を襲って武装し、市民軍となった。空挺部隊は市の郊外に後退し、市民は道庁を“接收”して光州は解放区となる。だが、市外への電話や列車、高速バスなどすべてのルートが断たれ、光州は軍によって完全に封鎖された。テレビは、連日、光州市民を暴徒呼ばわりし、この騒乱がスパイや不純分子の策動によるものだと報じた。⁶



(大韓民国歴史博物館より 撮影者 増本雄大)

⁶文 京洙『韓国現代史』、岩波新書、2005 年、144-145 頁参照



(大韓民国歴史博物館より 撮影者 増本雄大)

解放区となった光州に22日に光州で軍用ヘリが空中を旋回しながら、「暴徒たちに告ぐ」というビラを配布している⁷。この暴徒という言葉に対して光州市民は憤った。映画光州5.18などでも見られるように光州市民は暴徒ではないと言う。韓国における暴徒とはアカ(共産主義者)の意味が強く、即ち北朝鮮の思想を持つものとされる。この暴徒という言葉が政府側は度々使っている。

同日朝、市民たちは錦南路に出て廃墟のように散乱した街の片づけと清掃にとりかかった。抗争の指導部は、道庁を拠点に放置された遺体を收拾し身元を確認する作業を始めた。封鎖のために日用品不足が懸念され、買占め売り借しみを防ぐ手立てがとられた。握り飯、パン、牛乳、ドリンク剤などが主婦や店主たちによって市民軍に提供された。市民軍と学生たちは治安維持のために破壊行為を防ぎ重要施設の警備をうけもった。その他、車両統制班、医療班、銃器回収班など自治のための機能が満遍なくととのえられた⁸。

5.18 自由公園を訪れた時、係のお婆さんが私に「大同団結、このような状況で犯罪は一切起こらなかった、それだけは覚えて帰ってほしい」とおっしゃった。それほどにこの「大同団結」は光州民主化運動において大事な意味を持っている。

この即席の自治共同体の執行機関として、市の有力者や学生による市民收拾対策委員会がつくられた。委員会は、戒厳軍と交渉し、武装解除の条件として、連行者の釈放、過剰鎮圧を認めること、死亡者への補償などを求めた。だが、戒厳司令部は「金大中内乱陰謀罪」の中間捜査結果を発表し、光州市民をより一層激昂させた。同日、韓米連合同司令官ウィッカムは、麾下の第20師団の兵力移動を承認した。そのことは、米軍をこの光州での残忍な鎮圧作戦の共犯者とした。

收拾対策委員会は、武装解除をめぐる穏健派と闘争派に分裂し、25日、闘争派を中心に10人からなる新しい執行部がつくられる。執行部は、学生、会社員、運転手、教師、信用組合の職員などからなり、年齢は20代半ばから30代の初めだった。

26日には最後まで闘うことが決議され、10人の女性を含む250人余りが道庁に立てこも

⁷ 光州広域市 5.18 史料編纂委員会『5.18 民主化運動』5.18 記念文化センター、2013年、132頁参照

⁸ 文 京洙『韓国現代史』、岩波新書、2005年、145頁参照

り、錦南路のYMCAビルにも30人余りが立てこもった⁹。

27日3時に戒厳軍が戦車を先頭に市内に進入。「戒厳軍が攻めて来ます。市民の皆さん、私たちにご協力ください。」という、女性の哀切な街頭放送が市内に流れた¹⁰。4時、降伏の呼びかけがあった。市民軍が道庁を照らすサーチライトを銃撃したのをきっかけに空挺部隊の一斉攻撃が始まった。上空からは武装ヘリが空挺部隊を援護した。空挺部隊は投降して道庁前広場に出た市民軍8人をも容赦なく射殺した。交戦は1時間ほどでおわり、5時10分道庁は軍に占拠された。YMCAのビルにも空挺部隊が投入され2名が死亡、29人が生け捕りとなった。

この日の作戦に投入された兵力は6172人、市の外郭での作戦行動まで含めると2万人を越えた¹¹。

公式に確認された統計結果によると当時の被害は、死亡者155名、行方不明者76名、負傷者(負傷後の死亡者含む)、連行、拘束者など計4965名であったという。この数字は5.18民主化運動関係者補償現況(関係者による補償申請8721件中、公認された5252件-2010.12.31基準、光州広域市の資料)によるものであり、実際には捜査期間中に違法に連行された者だけでも、3千名以上になるはずである。さらにデモ中に理不尽に連行された者になると、どれ程になるのか見当もつかない¹²。



撮影者 増本雄大)

上の写真は5.18自由公園である。この公園の敷地内にある自由館で老婆さんから光州件について史料を見ながら日本語で説明を受けた。

⁹文 京洙『韓国現代史』、岩波新書、2005年、145-146頁参照

¹⁰光州広域市5.18史料編纂委員会『5.18民主化運動』5.18記念文化センター、2013年、134頁参照

¹¹文 京洙『韓国現代史』、岩波新書、2005年、146-147頁参照

¹²光州広域市5.18史料編纂委員会『5.18民主化運動』5.18記念文化センター、2013年、47頁参照



(撮影者 増本雄大)

上の写真は敷地内にある 5.18 の再現の人形である。



(撮影者 増本雄大)

上の写真は憲兵隊本部事務室である。



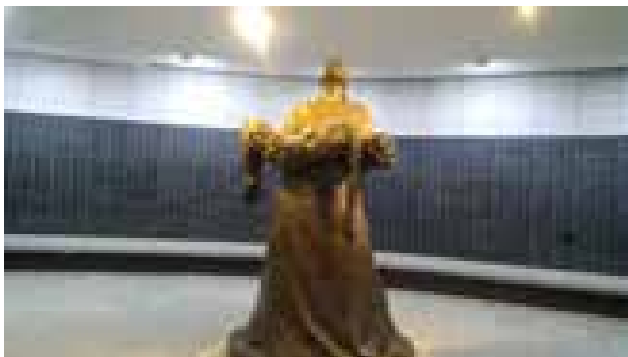
(撮影者 増本雄大)

上の写真は当時、民主化運動に参加した拘束者が軍事裁判をうけた法廷である。



(撮影者 増本雄大)

上の写真は 5.18 記念公園である。像の下にあるものは祭器で悲しみと苦難の歴史を祈念し礼を捧げるという意味を持ち、人物像は国家と民族の運命を躬った光州の民の勇気と愛を表現し、像の後ろの箱状のものは、棺のレリーフで、埋葬された棺が飛び出した姿により、力と勇気を表現し、周りのステンレス造形物は光の反射により、明日に向かう希望と喜びを表現している。



(撮影者 増本雄大)

上の写真は棺のレリーフから入ったところにある。真ん中の人物像は救いの形象として、母の大きく永遠な愛を表現し、周りには 1980 年 5・18 民主化運動に参加した関与した関係者の名前を刻印し記念している。



(撮影者 増本雄大)

上の写真は国立 5. 18 民主墓地にある 5.18 民衆抗戦追慕塔である。高さ 40m の壮大な石造塔で塔の中央に位置する卵形の造形物には、5.18 民主化運動の犠牲者の霊が新しい命

を得て蘇ることを祈る心が込められている。



(撮影者 増本雄大)

上の写真は大同世上軍像で悲しみを乗り越えて勝利を歌う“大同世上(光州市民共同体)”の姿を形象化している。

5.おわりに

民主化運動の調査を 3 都市で行ってみてどれも残酷で悲惨なものが多かった。特に光州は市街戦において負傷した姿が多く撮られていて見てもらえない写真、遺品も多くあった。

民主化運動で起きた様々な悲惨な出来事を起こしてはいけないというものも見えた。ソウルの前対共分室は今、警察庁人権保護センターとなっていて、光州は人権の街としていたるところに人権についての展示物がある。

負の歴史であるのは間違いないが、このことを忘れてはいけない。それを教訓にすることができると思う。光州市民は特に父母や祖父母が経験したことを忘れてはいけない、または子や孫達に伝えようという形が見える街であった。

韓国におけるウリという精神。光州民主化運動時の大同団結、これはまさしくこの精神であると思う。「私」ではなく、「私達」。これを考えることで韓国が見える。

近年、日韓は決して、政治では良い関係と言える状況ではない。政治だけならいいがネットでは両国の誹謗中傷、また日本ではヘイトスピーチという形もある。このようなことは相手の国を考えていないから発生すると思う。相手の歴史を知ること、人を知ること、それができれば日韓はわかりあえると思う。

参考文献

文 京洙『韓国現代史』、岩波新書、2005 年、

光州広域市 5.18 史料編纂委員会『5.18 民主化運動』5.18 記念文化センター、2013 年